

「あびる・かぶる・(きる)」

堀場千鶴子

1. 類義語としての「あびる」と「かぶる」を中心に

「あびる」「かぶる」は、各々、明らかに違った意味領域を持つた語である。たとえば、ヲ格の名詞が「帽子」である時は、「かぶる」しか用いられず、海水浴をするという意味では、「水をあびる」としかいわない。しかし、ヲ格の名詞が「水・ほこりほどこまかいもの、あるいはこまかく粒状に分かれうるもの」にほると、「あびる」「かぶる」の両方が用いられる。この^(注)ような現象には、これら二語のどのような意義特徴が反映されているのだろうか。

ここでは、他動詞としての「あびる」「かぶる」をとりあつかうことにする。これら二語は、いずれも \sim か(い) \sim ヲ \sim ニ「あびる・かぶる」という構文をとり、二格は表記されることが少ないが、か(い)格の名詞全体または一部を表わす語になる。

また「かぶる」は、どうしても、着衣動詞(衣類などを身につけることを表わす動詞)としての特徴を無視することができないので、「きる」とも比較してみることにした。

2. 着衣動詞「かぶる」と「きる」について

まず、衣類またはそれに準じるものをヲ格にとり「かぶる」「きる」についてみていこう。

「かぶる」	「きる」
(1) 帽子をかぶる。	(6) シャツをきる。
(2) 王冠をかぶる。	(7) セーターをきる。
(3) 頭巾をかぶる。	(8) ジャケットをきる。

- | | | | |
|----------|------|-----------|-----|
| (4) かぶとを | かぶる。 | (9) コートを | きる。 |
| (5) 笠を | かぶる | (10) よろいを | きる。 |

「かぶる」は、形あるものを頭にのせる、「きる」は、衣類を身につけることを表わす。

しかし、「かぶる」は、形あるものだけでなく、布や衣類を頭にかけるときにも用いられる。

- (12) 外套を かぶる。
 (13) 大掃除のとき、頭に 手拭を かぶる。

また、頭だけでよく、

- (14) 面を かぶる。

というように、顔にかけるときも 用いられる。以上から、「かぶる」は(i)くか(ハ)格にくるものが、意識的に、布・衣類またはそれに準じるもので、頭部をおおう>という特徴をもつといえる。

「きる」の場合

- (15) 中学生のころ セーラー服を きて 学校に 通った。
 (16) 就職運動で 背広を きて 歩きまわる。

スカートやズボンも、本来は「はく」で表現するのに、(15)(16)では、それらまで「きる」で表わされている。このように、一般に、(ii)く衣類などを身につける>ことを表わす場合は「きる」が用いられるようだ。

「ふとんをきる」という例は、小学館の『日本国語大辞典』には載せられていなかったが、『角川国語中辞典』には、載せられていた。これを認めるかどうかは個人差があるが、一応認めるという立場で、「かぶる」と比較してみよう。

- (17) 頭から スッポリ ふとんを かぶる。
 (18) 頭から スッポリ ふとんを きる。
 (19) 頭まで スッポリ ふとんを かぶる。
 (20) 頭まで スッポリ ふとんを きる。

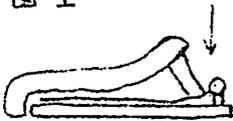
(17) ~ (20) の頭の所を他の身体の部分におきかえてみるとどうだろう。その結果は、下の表のようになる。

		頭	眼元	首	肩
「かぶる」	まで	○	○	○	×
	から	○	×	×	×
「きる」	まで	○	○	○	○
	から	×	×	×	×

二つの注目すべき点が出てきた。ひとつは、「かぶる」において、頭に關してのみ「から」がいえるということ、もうひとつは、「かぶる」は「首」以上の部分でよいといえないことである。

まず、第一の点から考えていこう。この場合、「頭から」といっても 実際には、頭から全身にふとんをかけるのではなく、足先から全身にかけるのである。また、人間が立っている場合、その方向と重力の方向が一致し、頭のある方が、方向的に上になる。しかし、人間が横になっておる場合

図 1



合は、そうではなくなる。ふとんを「かぶる」時は、図 1 のような状態にあり、重力の方向に沿った上の方からふとんにおおわれることになる。そこで、人間は立っている場合の感覚が抜け切らず、上からという意味で、「頭から」といってしまうのではないか。第二の点については、足先から「首」「眼元」「頭」までおおおうということ、全身をおおう場合、少なくとも頭部の一部分がおおわれていはいと「かぶる」とはいわれない。以上から、「かぶる」は(III)くか(ハ)務のものが、意識的に、上方から、少なくとも頭部の一部をふくめて、全身をおおうという特徴をもつといえる。

3. 「かぶる」と「あぶる」について

3.1. 「あびる」のみが用いられる例

「あびる」は、着衣動詞の性質をもたず、したがって2で考察した例文の述部を「あびる」でおきかえることはできない。それでは、「かぶる」については用いられず、「あびる」しか用いられない例文を考えてみよう。

(1) 日の光を あびながら うたたねしている。

(2)×日の光を かぶりながら うたたねしている。

「日の光」にかぎらず、光の場合は「あびる」しか用いられないようだ。この場合の「あびる」は、光の中に身をおくことを表わしている。

「水あび」という言葉はあるが、「水かぶり」という言葉はないようだ。この場合の「水」は、海の水、プールの水などであろう。水の中につかるという意味では、

(3) 風呂を あびる。

(4)×風呂を かぶる。

「あびる」しか用いられない。(1),(3)は、「あびる」のは全身であるが、

(5) 顔に 光を あびた。

(6)×顔に 光を かぶった。

(7) 背中に 水を あびた。

(8) 背中に 水を かぶった。

「顔」「背中」など、身体の一部に「あびた」ことを表わすときもある。(8)については、3.2.でふれる。))

また7格の名詞を、身にうける時、(3)ほか(ハ)格の名詞の意志で行っているが、(1),(5)は意志に関係なく、(7)は不明である。

そこで、「あびる」は、(IV)くか(ハ)格にくる名詞の意志により、またはそれにみかからず、光、水などで構成された空間に、か(ハ)格の名詞全体または一部がおかれるという特

徴をもつ。

3.2. 「かぶる」「あびる」が似た意味で使われる場合

3.1. で「格」にくる語は、光、水であった。それでは、それ以外の気体、液体、および固体については、どうだろうか。

—気体—

(1) たき火の煙を あびる。

(2)×たき火の煙を かぶる。

(3) 放射線を あびる。

(4)×放射線を かぶる。

(5) 熱風を あびる。

(6)×熱風を かぶる。

(7) 街角に立っていて 排気カスを あびた。

(8) 街角に立っていて 排気カスを かぶった。

(9) エントツの真黒煙を あびた。

(10) エントツの真黒煙を かぶった。

(7)~(10)の「かぶる」は、か(ハ)格の名詞の意志とは関係がない。しかし、「たき火の煙」「放射線」「熱風」に比べ、「排気カス」「エントツの真黒煙」は、視覚的にきわ立ち、上方からおおわれると意識されやすい。そこで「かぶる」は(V)か(ハ)格か意志によるとよらず、上方から気体におおわれる、「あびる」は(1)から「かぶる」が(VI)あまり方向性が意識されないといえる。

—液体—

(11) シャワーを あびる。

(12)×シャワーを かぶる。

(13) 傘をささずに、雨を あびる。

(14)×傘をささずに、雨を かぶる。

(15) 舟は 大波を あびた。

(16) 嵐で 船が ひどくゆれ デッキまで 波を かぶった。

(15) 暑いとき 水を あびる。

(16) 暑いとき 頭から 水を かぶる。

(11), (13)の「シャワー」と「雨」は上から身にかかってくるのだから、「かぶる」を用いてもよさそうに思える。ところが、実際には使えない。それは、「シャワー(の水)」や「雨」は液体であるから、(14)や(16)のように勢いをもたず、て身にうけ付けると、おおわれたように意識されたいからではなかろうか。おおわれているという意識が強く働く場合の文字表現などでは、「雨」の場合も「かぶる」が使われるようである。

(17) 雨を 灰のように かぶって 綿菓子 を 食べている女。
(放浪記) 『動詞の^{意味}用法の記述的研究』

と、載せられてあった。「かぶる」の場合ニ格にくる身体の部分には、頭部または全身に限られるだろうか。

(18) 足に お湯を かぶって やけどした。

のように「足」がくることもある。もちろん「足」が全身に変え

(19) 全身に お湯を かぶって やけどした。

でもよい。またこの場合が(イ)格の名詞の意志とは無関係である。3.1.の(8)の場合もこの状況とよくにているが、(8)の方は、(イ)格の意志による場合もある。以上をまとめると、「かぶる」は、(vii)くか(ハ)格が意志にまじりまたはよらずに、上方から勢いよく、液体に、全体または一部が「おおわれる」ことを表わす。

— 固体 —

(20) たくさんの火の子を あびた。

(21) たくさんの火の子を かぶった。

(22) 本だけの本が 埃を あびた。

(23) 本だけの本が 埃を かぶった。

(24) 山が 白い雪を あびた。

(25) 山が 白い雪を かぶった。

(26) 有珠山噴火で 農作物が 火山灰を あびた。

(27) 有珠山噴火で 農作物が 火山灰を かぶった。

(28) 砂場で 腕白小僧が 砂を あびた。

(29) 砂場で 腕白小僧が 砂を かぶった。

(24) で明らかのように、「あびる」にはくおおわれる>意味はない。また、(28)、(29)の場合、「腕白小僧」が自分の意志で「砂」を身にうけている場合とそうでない場合があるようだ。以上をまとめると、「あびる」は、(VIIIX か(ハ)格の意志によりまたはよらず、粒状の固体で構成された空間に、か(ハ)格全体または一部がおかれる>となり、「かぶる」は、(IXX か(ハ)格の意志によりまたはよらず、粒状の固体に、上方から全体または一部をおおわれる>となる。

4. か(ハ)格にくる名詞について

「きる」は

(1) 犬が チョッキを きている。

何どのように、擬人化されたものがくるようだ。「かぶる」「あびる」はそのような制限はない。

(2) 松の木が 雪を かぶる。

(3) 本が 埃を かぶる。

(4) 路上のアキカンが 真夜中の電燈の光を あびている。
ほど。

5. 比喩的用法

(1) 友人の罪を かぶる。

(2) 友人の罪を きる。

(3) 先輩の恩義を かぶる。

(4) 先輩の恩義を きる。

(3) のように、う格が 負担をかける時「かぶる」は使われている。

(5) 子供を 買いかぶった母親。

(6) 猫を がぶって おとなしくする。

など「かぶる」は、真実の上に何かをのせてしまうことを表わす。

「あびる」については

(7) 非難を あびる。

(8) 拍手を あびる。

などがある。以上をまとめると下の表のようになる。

	圧迫感	かい格の意表	才格の価値
「かぶる」	+	+	-
「きる」	±	+	±
「あびる」	-	-	±

(注)『動詞の意味・用法の記述的研究』P.260

参考文献：

- 新村出編『広辞苑 第二版 補訂版』1976年 岩波書店
金田一京助他『新明解国語辞典 第二版』1974年 三省堂
日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』1972-76年 小学館
時枝誠記吉田精一『角川国語中辞典』1973年 角川書店
文化庁『外国人のための基本語用例辞典』1971年 大蔵省印刷局
徳川宗賢・宮島彦夫『類義語辞典』1972年 東京堂出版
柴田武他『ことばの意味』1976年 平凡社
国立国語研究所『分類語彙表』1964年 秀英出版
国立国語研究所『動詞の意味・記述的研究』1972年 秀英出版

言語経歴：1955年11月、東京都足立区に生まれ、現在に至る。